モーニングの都市民俗学

The Urban Folklore of the "Morning Set"

島村恭則

❶問題の所在
❷事　例
❸若干の検討

【論文要旨】

本論文では、都市民俗学の立場から、喫茶店、とりわけそこで行なわれるモーニング（朝食を、自宅ではなく、喫茶店のモーニングセット〈モーニングサービス〉でとる習慣）という事象に注目し、記述と問題点の整理を行なった。本論中で行ないえた指摘は、およそ次のとおりである。

（1）モーニングが行なわれる理由は、①労力の軽減、②単身者の便宜、③コミュニケーション、のうちのどれか、あるいはそれらの複合に求められる。

（2）日本におけるモーニングは、豊橋以西の、中京圏、阪神圏、中四国のそれぞれ都市部、とりわけ工業地帯の下町的な地域に分布しているものと見ることができる。

（3）モーニングは、一九六〇年代後半から行なわれるようになっていると見られる。その場合、喫茶店経営者側は、出勤前のサラリーマンへのサービスを意図してモーニングセット／サービスを開始したのであったが、これが地域で受容される際には、地域の生活者、とりわけ女性たちの井戸端会議の場としての機能を果たすようになっている。

（4）アジア的視野で眺めた場合、都市社会においては、朝食を外食するほうが一般的だといってよいくらいの状況が展開されており、日本のモーニングには、アジア都市社会に共通する生活文化としての性格が存在するといっても過言ではない。

（5）モーニングの場は、他者と他者とが場を共有しながら、そこでさまざまな言葉を交わす公共圏であるが、そこで語られるのは、決して論理的に整理された明晰な言葉ではない。むしろ、モーニングの場は、そうした論理的な言葉で形成される「市民的公共圏」からは排除される言説あるいは人々が交流する場として存在するのであり、この空間は市民的公共圏に対する「もう一つの公共圏」として位置づけることができる。

❶問題の所在

民俗学では、いわゆる都市民俗学の領域で、都市に存在する生活空間について、その機能や意味を考察した研究を蓄積してきている。そこでは、団地アパートといった居住空間のみならず[1]、都市に存在する多様な空間が扱われている。

たとえば、風呂屋や床屋をとりあげて、コミュニティ空間としての機能やその変化を扱った研究〔岩本 一九八三〕、風呂屋のもつ擬似他界性について指摘した研究〔岩本 一九八五〕、路地裏や公園のもつ象徴論的意味を分析し、「異界との境界」としての性格を抽出した研究〔高桑 一九八九〕、通勤電車という空間を記号論的に解釈し、「私人から公人への心理的な変身を図るための結界の装置」としての意味を指摘した研究〔岩本 一九八六〕、コンビニエンスストアを受容した住民の意識のあり方について民俗誌的に分析した研究〔森栗 一九九四、高岡／村上 一九九七〕、市場・長屋・地蔵をめぐる都市コミュニティのあり方の変化を検討した研究〔森栗 一九九八〕などをその具体例としてあげることができよう。

こうした中で、いまだ研究の俎上に上っていない空間の一つに喫茶店がある。喫茶店とは、いうまでもなく、「コーヒーや紅茶を中心に各種飲料や軽食などを供する飲食店」〔神崎 一九九九〕のことであるが、民俗学の観点から観察を行なうと、そこには単なる飲食空間としての役割以上のものが存在していることを指摘可能であり、これについて検討することは、都市における日常生活のあり方を考える上で、重要な知見をもたらすものと予測される。以下、本稿では、喫茶店、とりわけそこで行なわれる「モーニング」（朝食を、自宅ではなく、喫茶店のモーニングセット〈モーニングサービス〉でとる習慣[2]）という事象に着目し、記述と問題点の整理を行ないたい。

❷事　例

以下、現時点までに筆者がフィールドワークによって確認しえたモーニングの事例、および文献やインターネットに見ることのできるモーニング関連の記述を提示する。事例は、地理的に日本列島の東から西へ向かう形で提示する。

事例1　愛知県豊橋市

市内の喫茶店は、午前七時、遅くとも七時三十分にはどこも開店する。開店と同時に客が入ってくる。開店前から店の前で待っている老人も多い。八時をすぎると客の数が一段と増える。開店から十一時までがモーニングタイムで、これは、コーヒー一杯の値段（三五〇円とか三七〇円）を出すだけで、トースト、サラダ、ゆで卵がサービスとしてつけられるというものである。この時間にコーヒーを注文すると、必ず、店員から「モーニングはお付けしますか？」と聞かれる。もっとも、地元の常連客の場合は、席につくだけで、何も注文しなくてもこのモーニングサービスが出される。

豊橋を含めた中京圏の喫茶店では、このモーニングサービスがさかんであり、客は店ごとのサービスの内容をよく吟味して店選びをする傾向もある。そこで競争が激しくなっており、店によっては、トーストをサンドイッチにしたり、ヨーグルトをつけたり、トースト、サラダ、ゆで卵に赤だしの味噌汁をつけたりと工夫がなされている。また、別料金で、「デラックスモーニング」（ホットドッグ、ベーコン、スクランブルエッグ、サラダ、ヨーグルトからなり、五〇〇円）や「バイキングモーニング」（コーヒー、紅茶、ジュース各種、サンドウィッチ、サラダ各種、目玉焼き、スクランブルエッグ、フライドポテト、ウインナー、ベーコ

写真１　豊橋市内の喫茶店

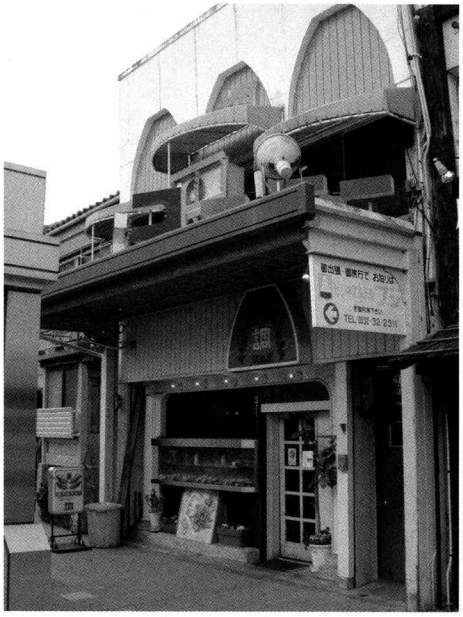

写真２　豊橋市内の喫茶店

写真３　モーニングセットの一例（豊橋市内）

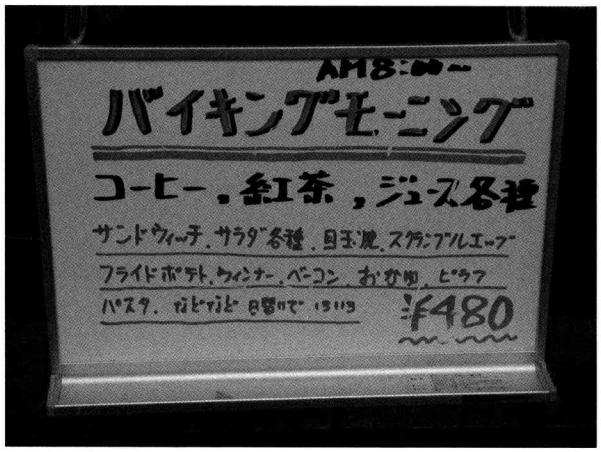

写真４　「バイキングモーニング」のメニュー（豊橋市内）

ン、おかゆ、ピラフ、パスタなどからなり、四八〇円）が出されている店もある。なお、モーニングタイムにコーヒーだけを注文する場合は、モーニングタイム外のコーヒーの値段よりも三〇円くらい値引きされた値段となり、この意味でもサービスがなされていることになる。

モーニングにやってくる客層は、老若男女さまざまである。一人で来ている客は、店に備え付けのスポーツ新聞を手にトーストを食べながら、店の主人や店員と世間話をしている。二人連れの場合は、夫婦であったり、近所の主婦同士であったりする。また、勤め先の同僚や近所の主婦、近所の商店主といった感じの人々が三人とか四、五人でテーブルを囲んでいる場合もある。平日の場合、これらの人々は決まった席に座ることが多い。ときどき常連以外の客が先に席を占めていたりすると、あとから来た常連はいつもとは違う席に座らざるを得なくなり、そうなると連鎖的に他の常連の「指定席」も狂ってくることになる。常連客は、レジの横にキープされたコーヒーチケットで支払いをすることになっており、店員は、モーニングサービスを客のテーブルに出すと同時にチケットを一枚切りとっている。したがって、客はレジで立ち止まることなく、席をたつとそのままっすぐに店を出て行く。

常連客たちによると、「家では朝食をとらず、毎日、喫茶店のモーニングが朝食となっている。家でとらないのはこれが習慣だから。その理由をよく考えてみると、忙しいのでいちいち朝食のしたくをするのが面倒だから、近所の人や店の人と話をするのが楽しみだから、といったところになる」という。

土曜、日曜は、家族連れでモーニングにやってくる人が多い。この人々によると、「平日は家でお母さんが朝食の用意をするが、休みの日くらいは楽をしてもらいたい、ということで一家で喫茶店に行く。休みの日はお父さんが家にいるので、車で郊外の喫茶店に行きやすいというのも理由の一つである」という。家族連れの休日のモーニングは、昼食を兼ねた遅い朝食であることが多く、モーニングのあとは郊外型ショッピングセンターに立ち寄って一家で買い物というのがこの地域の休日の過ごし方の一つのパターンになっているともいわれている。

以上は、筆者のフィールドワークにもとづく記述であるが、インターネット上には、同地のモーニングについて紹介しているサイトも存在する。ある個人によって運営されている「聞いて驚け　見て笑え！　豊橋モーニング事情」というサイトでは、栃木県宇都宮市が「餃子の町」を名乗っているが、それならば豊橋市が「モーニングサービスの町」宣言をしてもこれに異を唱える人はいないであろうとし、以下のような記述がなされている。

「愛知県、中でも豊橋は喫茶店がやたらとたくさんあります。商店街はもちろんのこと、住宅街の裏通り、キャベツ畑地区の一角、「こんなところで大丈夫か？」と心配になるような立地の店も少なくありません」「平日午前九時半の喫茶店を覗いてみましょう。そこには外回りに出たはずの営業マン、お店を奥さんに任せて出てきた商店主、朝の家事が一段落した奥様のグループ、ゲートボール帰りのお年寄りで一杯です」「土日、祝日はもっとすごいです。一家揃ってやってきます。幼児からお年寄りまで三世代七人連れも、決して珍しい光景ではありません。お父さんはジャージにサンダル、就学前の子供はパジャマのままというのが正装とされています。皆、何しに来ているのか？　それはモーニングサービスを楽しみに来ているのです」「当地の場合は、トーストもゆで卵もサラダも、ときにはヤクルトもコーヒー代だけで出てくるのです」「地元民はモーニングサービスとかモーニングセットとか言わずに『モーニング』と略します」（www.toyo-ken.com/morningjijo.htm）。

ところで、豊橋市には、同地を日本におけるモーニング発祥の地とする言説が存在している。二〇〇〇年四月六日付け『中日新聞』に掲載された「なるほど　フムフム　分かったゾ　あいち博士」なる記事には、

豊橋市民の間に、「モーニングサービスは豊橋から全国に広がったからね。市内では常識だよ」という語りが存在することが示され、それについて、「それは本当だと思いますよ。少なくとも業界ではそう言われています」と述べる愛知県喫茶環境衛生同業組合豊橋支部長の発言も紹介されている。同記事によれば、豊橋駅に近い松葉町の喫茶店「仔馬」が、一九六三年に開店してから一、二年後にモーニングサービスを開始し、ここから豊橋市内、愛知県内、全国へと広まって行ったといわれているという。そして、モーニングサービスを開始した当時の店主の妻による「駅前の店なので、出勤前のお客さまが多かったのですが、何かおなかの足しになるものが欲しい、と要望がありました。それでトーストを出したのがきっかけでした」という発言も取り上げられている。また、その発祥の理由については、前出の支部長による「農業が盛んで、新鮮な野菜や果物が手に入りやすいことも理由の一つじゃないかな」とする意見を紹介している。

モーニング豊橋発祥説は、別のところでも取り上げられており、豊橋市が刊行した『豊橋市中核市移行記念誌』〔豊橋市役所企画部企画課 一九九九〕にも、「モーニングサービス、豊橋が発祥であることを知る人は少ない。もう四〇年近くも前、豊橋のある喫茶店での試みが全国に広がったのです。その喫茶店でも当時のことを覚えている人はいなくなってしまいましたが、豊橋は農産物が豊富でしかも安く手に入るということもあり、朝のゆったりした時間にサービスで提供したのが好評を博し、以後他の店、他都市にも広がり現在に至っているとか」という記載がある。

この豊橋発祥説は、筆者による豊橋市でのフィールドワークでもしばしば耳にすることができたが、店名を特定する発言には出会わなかった。そして、「仔馬」の開店以前から店を開いているという松葉町のある喫茶店の主人によれば、「『仔馬』さんがルーツだという話は聞いたことはあるが、うちの店は『仔馬』さんが開店する前からモーニングサービスをやっており、それは、その当時、喫茶店でモーニングサービスを出すということは、もうよその街でも行なわれていたからだった。よそでもやっているからうちもやったのだが、どこがルーツかといわれてもそのようなことはわからない。『仔馬』さんがルーツだというのは、あの店は規模が大きくて、市内でも有名だからではないか」と述べている。モーニングサービスの発祥については、後出のように、他の都市とする言説も存在しており、特定の起源を一元的に設定することは難しいといえよう。むしろ、同時期に複数の場所で発生が見られたと考えるべきであるが、この点については後述する。

事例2　愛知県名古屋市

名古屋でもモーニングは行なわれており、名古屋の生活文化の特徴について取り上げた『摩訶不思議シティ名古屋の本』には、「ここまで進んでいる!?　喫茶店好きの名古屋人」として次のような記述がある。

はじめて名古屋へ来た人が、まず驚くのは、喫茶店の数がやたら多いということだろう。駅周辺や繁華街はもちろんのこと、なんでもない閑静な住宅街や郊外にまで点在しているのである（中略）。店内の様子は、東京などの喫茶店とさして変わりはない。平日の午後であれば、仕事の合間に居眠りをしている営業マンや、打ち合わせをするビジネスマンの姿が見られる。ただ、これが朝ともなると様相が一変する。

一見、瀟洒でオシャレだなと思える店でも、なかに入ってみると、一瞬、敬老クラブにでも来たのかと思えるほど、お年寄りで賑わっているのである。名古屋のお年寄りは、とにかく喫茶店が大好きだ。ゲートボールでひと汗流した老人たちや、病院帰りのお年寄りたちで、喫茶店はごった返しているのである。

さらにこれが休日の朝ともなると、また趣が違ってくる。今度は

ファミリーが主流を占め、家族で朝食をとっている光景が一般的となる。だが、よく注意してみると、パジャマ姿やスウェットスーツ姿（たいていは着古したジャージの上下）のお父さんもいたりするのである。こうした傾向は郊外にいくほど顕著になる。そこには東京その他の地域では、考えられない光景が繰り広げられているのである。〔中澤 二〇〇〇、四三―四四〕

（名古屋の喫茶店は―引用者註）ほとんどが駐車場付きなので、ドライブがてら車で行けるのだ。気に入ったお店があれば、少しくらい遠くても平気でいきつけの店にしてしまうのも名古屋人だ。なにせ車という便利な足があるのだから、少々の距離は全く気にならないのである。〔中澤 二〇〇〇、一五二〕

また、ホームページ上でも、「尾張喫茶店事情」というページを公開している個人があり、そこでは「尾張地方の人は、喫茶店が大好きです。私は、この地方に住む前は喫茶店は若者が行くところだと思っていました。でもここでは違います。この地方では、喫茶店は、老若男女すべての世代が頻繁に行くところとして存在しています。若者がデートのついでにちょいと寄る場所ではなく、近所のおじちゃんおばちゃんが通うのを日常の習慣とし、ローカルなコミュニケーションの仲立ちをする場所として存在しているのです」（www.i-chubun.ne.jp/emi/futagono/kissaten.html）という記述がなされている。

事例3　三重県桑名市

三重県桑名市でもモーニングがさかんである。以下は、同市に暮らすある家族の事例である。この家族は、毎週日曜日の朝は家族全員で近所の喫茶店に朝食をとりに行くことが多い。これは祖母が亡くなってから行なうようになった習慣である。前日に、明日の朝は外で食べるよ、と母が言い、家族はそれにしたがって起きることになっている。喫茶店ではおのおのモーニングサービスを食べる。家族が一同に集まるのはこの日曜の朝食くらいである。家族で話もするが、父は新聞を読んでいたりするし、みんなも適当に会話をするくらいであって、あらたまってどうこうというわけではない。この朝食が終わると、みなおのおのどこかへ出かけて行ったりするのであり、夕食はばらばらに食べることも少なくない。日曜に朝食を喫茶店でとるのは、日曜くらいは母を楽にさせてあげたいからであるという。

事例4　東大阪市衣摺

大阪でもモーニングが非常にさかんである。文化住宅と町工場が建ち並ぶこの地域では、一九六四年ころからモーニングが行なわれているという。たとえば、ある一家の場合、午前七時三十分ころ、父親が子供を連れて近所の喫茶店に行き、モーニングをとる。食べ終わると、父親は工場へ、子供は学校へ行く。その後、九時ころ、母親が喫茶店にやって来て近所の奥さん同士でモーニングとなる。井戸端会議そのものの会話を楽しむ。こうした光景は、このあたりではごくふつうに見られるものである。ただし、「パパがうるさい家は、奥さんはモーニングには行けない。家族全員の朝食を奥さんがつくり、自宅で全員で食べている」というケースもある。とはいえ、そのような家でも、日曜日には家族全員でモーニングに行くことが多い。理由は、「日曜日の朝くらいはお母さんに楽をさせたいから」といったものである。

事例5　大阪市東淀川区

東淀川区のうち、下町的な雰囲気のある地域では、早朝、六時から開店している喫茶店があり、この時間からすでにモーニングが行なわれている。この地域は建設や建築の現場で働く人々が多く、朝の早い町である。なぜ朝早いかというと、彼らは道具を積んだワゴン車などで現場に

向かうが、朝の通勤時間帯の渋滞に巻き込まれると遅刻してしまう。そこで早朝のうちに現場に向かうのだが、出発前に近所の喫茶店でモーニングをとる。したがってこの地域の喫茶店は、朝六時から開店しているのである。味噌汁とご飯とコーヒーをセットにしたボリュームのあるメニューを用意している店もある。

また、この地域は戦前から現在に至るまで朝鮮半島出身者やその子孫たち（在日朝鮮半島系住民）が多く暮らす土地柄でもある。こうした人々のうちの一世の老人たちも、この早朝モーニングの常連である。早起きの彼らは、朝六時の開店前から店の前にやって来て、早く開けろとドアをたたいたりすることもある。彼らにとってモーニングは特別な場所である。それは、ここでは故郷の言葉である朝鮮語で友人たちと気がねなく会話することができるからである。一世はみな高齢で、ともに生きてきた仲間もどんどん亡くなっている。独居老人も多い。また、家族があっても、家庭の中では子供も孫も日本語が母語となっており、朝鮮語だけでは会話が成り立たない。いきおい、故郷の言葉で話しあえる仲間を求めて喫茶店通いになるわけである。

事例6　大阪市生野区

大阪市生野区は、地場産業であるケミカルシューズ製造やかばん縫製などの零細工場とそこを仕事の場とする人々が暮らす長屋がひしめきあった下町である。生野区には喫茶店が町のそこここに点在している。路地の曲がり角、長屋の一角などに小さな喫茶店が、お好み焼き屋などとともに店を出している。その多くは近隣の常連客だけを相手にして成り立っている店である。

午前八時ころになると、近所の人々が次から次へと店にやってくる。男性も女性もおり、年齢層も二十代から七十代くらいまでと幅広い。毎日やってくる人もいれば、週のうちに何日かとか、日曜日だけ、という人などさまざまである。一人で来る人もいれば、夫婦で来る人もいる。いずれも皆、近所の顔なじみである。

店ではモーニングを注文し、コーヒーだけを頼む人は皆無である。テーブルにつくと、近所の人が声をかけてくる。同じテーブルに座ることも多い。会話は店に入ってきたときからはじまっている。その内容は、工場の景気の話、野球の話、親戚や近所の人の噂、互いの子供や孫の話、病院や健康の話、などである。いつも顔をあわせる間柄であるので、話は断片的でも十分通じている。新聞を広げながらときどき会話に口をはさむという人もいる。

モーニングを食べ終わり、しばらく話を続けると店を出て行く。一人の滞在時間は、仕事を抱えている人は一五分から二〇分。老人の場合はもう少し長い。一人が出て行くと、こんどは別の人が入ってくるというように客の回転があり、だいたい九時三十分ころまでこのような状態がつづく。

この地域の人々の生活は、近年はそれほどでもないが、一〇年ほど前まではきわめて多忙であった。ヘップサンダルやかばん縫製などの家内工場で働いている人の場合、最盛期には朝の七時から夜中の一時、二時まで働いても仕事がはけないこともあった。また、出来高払いのため、それくらい無理をしてでも仕事をこなそうとしたのである。そこで人々は家で朝食を準備する時間も惜しんで働いた。モーニング発達の理由の一つはここにある。また、モーニングに限らず、昼・夕食を外食ですますことも珍しくない。あらかじめ行きつけの店に電話をして料理をつくっておいてもらい、店に入るとすぐに食べられるようにすることもあるという。因みに、生野区では、お好み焼き屋のメニューが多様化して発達しているが、これは、人々が夕食にお好み焼きを外食することが多いため、多くの店が出来、競争が激しくなったことの反映であるといわれている。

なお、生野区は日本有数の在日朝鮮半島系住民の集住地域であり（韓国・朝鮮籍者だけでも生野区の全人口の二五パーセントを占めている。これに日本への「帰化」をした人々などを加えればさらに多くの在日朝鮮半島系住民が暮らしていることになる）、モーニングにやってくる人の中にも在日朝鮮半島系住民は多い。昔から共にくらしてきた近所の〈日本人〉と同席してモーニングを行なうことはもちろんだが、場合によっては、在日朝鮮半島系住民だけの場合には、話題は、子供達を同胞同士で結婚させるための見合い情報が交換されたり、あるいは新しく密航してきた者の情報などがささやかれることもある。また、一世の老人やニューカマーの人々が会話の輪の中に混ざっている場合には、「朝鮮語と日本語のチャンポン」で会話がなされる。こういったところに在日朝鮮半島系住民のモーニングの特徴があるといえる。

事例7　大阪市西区

大阪市西区の西九条商店街周辺も、下町に相当する地域である。駅前の商店街をぬけると、中小企業のビルや町工場が建ち並ぶようになる。また商店街から裏側へ路地を入っていくと、そこには長屋が密集しているという地域である。この地域の喫茶店は、商店街の中にある喫茶店と中小企業・町工場エリアの入り口付近にある喫茶店とに大別できる。前者の客の多くは、商店主やその家族、長屋の住民である。後者の客は、よそからそこに通勤してきている人々であることが多い。

以下は、前者のタイプの喫茶店を営む人物の語りである。

「店は七時三十分に開店する。十時までがモーニングの時間である。この間に来店する客は毎朝約三〇人で、大半が常連である。客層は近くの商店主や奥さん連中が多いが、中には近くの会社に通勤してくるサラリーマンもいる。休日になると、商店主や奥さん連中の数はもっと増える。休日だけモーニングをとるという人がいるからだ。モーニングに来る人たちは、朝食を家でとらない。子供のいる家では、子供にだけトーストなどを食べさせ、弁当を持たせて学校に行かせると、母親のほうは近所の喫茶店に行く。朝食にたくさんの量はいらず、コーヒーにパンと卵があればそれだけでいいという人にはモーニングの量はちょうどよい。また、男たちも近所の商店主同士としていろいろな話をしている。町のあり方や選挙の話になるときもある。商店街の将来も当然、話題になる。また、店にくる近所の仲間とよそから通勤してくるサラリーマンとが意気投合して忘年会や新年会をやることもある。そういうときは、店としても寄付をしたりして応援するようにしている」。

写真5　大阪府東大阪市の喫茶店の看板
「いつ来てもモーニング」とあり、モーニングサービス以外の時間帯にもモーニングサービスと同じ金額でモーニングセットが供されることが示されている。

なお、この西区や事例6の生野区などの喫茶店では、春や秋には、店の入り口の自動ドアのスイッチを切り、ドアを空けたままにしていることがふつうである。これについては、店主たちにより、「下町の喫茶店は町の井戸端会議の場所であり、閉めきってしまうと、人が気軽に入って来れなくなってしまい、井戸端会議が成立しにくくなる。ドアを開放

しているのは、冷暖房の不要な春と秋だけだが、本当は冬も夏もそうしたいところだ。春・秋の開放状態のほうがふつうで、冬・夏はやむを得ずにドアを閉めているのだ」などと説明されている。

事例8　尼崎市阪神杭瀬駅周辺

この一帯は、商店街の裏に長屋や文化住宅が建ち並ぶ下町的雰囲気の濃厚な土地柄である。このあたりの長屋の軒先には植木や盆栽が所狭しと並べられていて、住民は毎日の水遣りを欠かさない。そこへ顔なじみの人が通りかかると、二時間くらいおしゃべりが続くこともしばしばである。商店街に買い物に行けば、何人もの人から「あら、きょうは何のご馳走？」と声をかけられる。子育ても、自分の家で育てられるのか、近所のおばちゃんたちに育ててもらっているのかわからないような暮らしの町である。ここに住む七十代のある女性におけるモーニングのある暮らしは、次のようなものである。

この女性は一人暮らしで、不動産屋を経営している。朝食は毎日喫茶店でとる。モーニングのことは、まさにモーニングという名称で呼んでおり、たとえば、「モーニング行こうや」「毎朝モーニングに来とる○○さん」というように使う。近所に喫茶店は一〇軒ほどあるが、彼女が行くのはそのうちの三軒で、とくに亜米利館（アメリカン）という店が気に入っている。「亜米利館が一番好きやわ。ママさんとも仲良しやし」。ただし、亜米利館は土曜、日曜が定休日なので、その日は別の店に行く。亜米利館は、今福の商店街から路地を入った一角にある。

彼女がモーニングに通っているのは、今から二〇年前、夫が亡くなり一人暮らしをはじめたときからである。一人でもくもくと食べていてもおいしくないから、というのが理由である。また、彼女は朝食のみならず、昼食、夕食も外食をすることが多い。外食をしないときは、最近近所にできたコンビニエンスストアでおにぎりなどを購入している。外食は、昼食はお好み焼き屋やうどん屋、夕食は居酒屋で湯豆腐とビールである。野菜などを買ってきて自宅で食事をつくっても、一人だと多すぎて食べきれず、材料も使いきれない。不経済なので三食とも外食にしているという。

亜米利館の主人（「ママ」）は、「芦屋出身のお嬢様」で、店は二〇年前から生活のためというよりは趣味のつもりではじめたという。阪神タイガースの大ファンで、店内には阪神の選手の色紙やメガホン、ぬいぐるみが飾ってある。

亜米利館にやってくるのは、近所の主婦の他、六十代以上の老人も多い。最高齢は九十歳だという。この人達は、「みな年金で暮らしている人ばっかりや。いろんな苦しみ、悲しみ、喜びを乗り越えて優雅な気持ちでおる人たち」である。

彼女は、八時半ころから一時間ほどこの店で過ごす。コーヒー、トースト、ゆで卵、サラダで四〇〇円のモーニングをとりながら、ママや常連客たちとおしゃべりをするのである。話の内容は、阪神タイガースのことや他のスポーツのこと、孫や夫や自分の自慢話、テレビ番組の話題が多い。また、他人の悪口をいうこともあるし、客同士のいがみ合いもある。彼女は、「ええ人がたくさんおるよ。でも、そんな人ばっかりやなくて、失礼な人、わがままやうぬぼれ屋もいっぱいおるわ。いろんな人間がおって、いろんな人間模様があるんよ」と語る。[3]

事例9　神戸市長田区「真野ふれあい住宅」

神戸市長田区は、「くつの街、ながた」というキャッチフレーズが用意されているほど、ケミカルシューズ産業の零細工場と長屋がひしめきあう下町であった。一九九五年の阪神大震災で多大な被害にあい、昔の町並みは消えてしまった。その後、復興まちづくりが行なわれて今日に至っている。一九九八年一月、震災復興の一貫として、この長田区真野

写真6　神戸市のコレクティブ住宅における「モーニング喫茶」の案内　背後は、コレクティブ住宅の食堂。

地区に市営のコレクティブ住宅「真野ふれあい住宅」が誕生した。

このふれあい住宅について記述している森栗茂一によると、「コレクティブ住宅というのは、独立した各世帯向けの住居と、入居者全員で使える台所、食堂、談話室などの共同スペースをそなえた集合住宅のこと」で、『真野ふれあい住宅』は三階建て、二十九戸の市営住宅で、ドアを閉めると自分の家で一人になれるが、扉を開けると路地のような鉢植えのある広い廊下や、隣と続いたバルコニーがある。共有のリビングに出るとみんなに会え、共有の台所で料理をして、大家族のようにみんなで食事ができる。子どものいる家族も、単身者も、若い世帯も、高齢者も、共に住むふれあい住宅」〔森栗　一九九八、六三〕だというものである。

この真野ふれあい住宅では、共有リビングにおいて、「モーニング喫茶」が実施されている。一ヶ月に二日程度で、事前にふれあい住宅の掲示板や近所の電柱などに案内のポスターが張り出される。当日は、ボランティアがやってきて、ふれあい住宅の住民とともに準備をし、朝八時からモーニングである。コーヒー一杯一〇〇円で、参加できるのは、ふれあい住宅の住民と、近隣の浜添二丁目、三丁目の住民ということになっている。ふれあい住宅の住民同士や、近隣の住民との間でのまさにふれあいを、モーニングという場を使って行なおうとする試みである。

なお、こうした発想が生まれてくる土壌として、同地における濃厚なモーニング文化の存在があることはいうまでもない。長田区でも喫茶店モーニングはたいへん盛んに行なわれてきたのである。震災前の同区におけるある高齢者の日常生活をとりあげた森栗茂一の記述に、モーニングが登場する。それによると、

朝は喫茶店でモーニングセット。小一時間かけて、スポーツ新聞を丹念に読み、銀髪の小意気なマスターと阪神タイガースの悪口を言い合う。ついで十時前から、病院の診察室前のいすに並んで友達と愚痴を口にする。診察の時、看護婦さんの手を握り返して、ふっと心が熱くなる。

帰りに市場へ向かう。魚屋の前で立ち話をして、豆腐屋で昼のおかずのごま豆腐を買い求め、肉屋で夜の焼き豚を百グラム、『ちょっとだけ、切っといて』と注文する。肉屋は面倒がらず、『夏ははよう食べなあかんで』といって、包みを渡す…。

市場での物を介した交流と会話が、高齢者の一日にアクセントをつけている。

そして自宅に戻って、テレビの時代劇を見ながらごま豆腐を食べる。風呂屋の前に並ぶ。たこ焼き屋で生ビールを一杯ひっかける。夕方、焼き豚で簡単な食事を取る。〔森栗　一九九八、四六―四七〕

というものであり、モーニングが一日の生活のリズムの中に確固たる位置を占めていることがよくわかる。こうした震災前の実態をふまえて

考えると、コレクティブ住宅における「モーニング喫茶」とは、この地域の高齢者たちに根付いてきた暮らし方の復興をめざして、行なわれているものに他ならないといえるであろう。[4]

事例10　神戸市新在家の復興住宅

復興住宅において、とりわけ老人を主たる対象として行なわれる「喫茶店」は、他の復興住宅においても見られる。たとえば、神戸市新在家にある復興住宅では、集会所を使って「コミュニティ茶店・新在家南3号棟」が開店されている。この復興住宅は、阪神電鉄新在家駅の南側につくられた六五八戸からなる建物で、神戸市、兵庫県、公団の三つの運営主体が、それぞれ建物を建てたものである。陸の孤島のような場所にあり、団地内には日常利便施設は皆無であり、買い物なども近くの国道を越えたところまで行かなければならないというロケーションにある。

「コミュニティ茶店」は、二〇〇一年十一月十六日から十二月十四日の間の月曜、水曜、金曜に開かれたもので、今後は、毎日開店をめざしたいとしている（同事業実施計画書）。開店時間は十時三十分から十五時三十分。コーヒー、紅茶、ミルクなど飲み物を主に、クッキー、パンなども用意され、値段は一律一〇〇円である。コミュニティ茶店を運営する「復興住宅・コミュニティ応援団」による事業計画書によれば、「現在、復興公営住宅では新しい住宅に移り住んだ後、新しい環境に馴染めないで、隣人や地域とのつながりをもてずに、住宅に閉じこもってしまっている高齢者を中心とする居住者が少なくありません。また、健全な食生活ができないで、日中からお酒を飲んだりしている人もいます。このような人達が、隣人や近隣とのふれあいをもち、安心して、健康な暮らしが維持できるようなきっかけをつくることが、緊急の課題です。一方、近隣とふれあって何かをしたい、生きがいを見つけたいと思っている意欲のある居住者たちに対しては、その場がないということも、課題の一つです」とあり、こうした課題への取り組みの一つとして、コミュニティ茶店が企画されたのだという。コミュニティ茶店の開店は、十時三十分であり、モーニングそのものではないが、これはボランティアなどスタッフの都合でこのようになったとのことであり、意図するところは真野ふれあい住宅のモーニング喫茶と同様のものと考えてよいであろう。

写真7　神戸市の福祉センターで行なわれている高齢者対象のモーニングの案内

事例11　愛媛県松山市

松山市の市街地でもモーニングはさかんである。早朝からやってくる老夫婦、六十代くらいの近所の女性たちが嫁の悪口も含めた世間話に花を咲かせる姿、別のテーブルでは、もう少し年齢層の若い主婦たちが人の噂や姑の悪口らしき会話をしている様子など、あちこちの喫茶店で目にすることができる。

松山にもモーニング発祥説が存在する。『ビジネスえひめ』（SPC出版）に掲載されたインタビュー記事によると、モーニングサービスは、一九六五年に松山市三番町に「喫茶モミの木」をオープンし、その後、喫茶店やレストランなどを多角的に経営した社長の発案によるものとい

う。社長の加藤智子氏は、インタビューに答えて、「昭和四十一年ころサラリーマンの朝食抜きが多いという新聞記事を見て、トーストと卵を付けたモーニングサービスを始めました。コーヒー八〇円にほとんど原価の二〇円をプラスした一〇〇円でした。これも大当たりし、四、五年経ってから東京や大阪など全国でも行われるようになりました」と述べている。モーニング「モミの木」発祥説は、これまで数回、テレビでもとりあげられたことがあり、松山市内ではこの話は多くの人が知っているとされている。実際、筆者も、パソコン通信でモーニングについて話題にした際に、松山市在住のある方から「モミの木という喫茶店の女主人が日本ではじめてモーニングを始めたっていう話です。証拠はっていわれると困るけど」というメールを受け取ったことがある。

事例12　高知県高知市

国立歴史民俗博物館の常光徹助教授の教示によると、高知市内には至るところに喫茶店があり、モーニングがさかんに行なわれているという。客はスポーツ新聞を片手にモーニングセットを食べ、また客同士で世間話に興じているという。常光氏のご両親もモーニングの常連で、朝食は自宅でとらずに、夫婦で喫茶店に行ってモーニングセットを食べるのが日課となっているとのことである。

事例13　山口県下関市

山口県下関市の在日朝鮮半島系住民集住地域では、朝八時三十分を過ぎると、長屋に暮らす中年以上の女性たちが、気の合った仲間同士、持ちまわりで仲間のうちの一人の家に集まり、そこでインスタントコーヒーと食パンの朝食をとるが、ここでは、このことを「モーニング」と称している。モーニングサービスのある喫茶店だけではなく、個人の家を会場にしたものについてもモーニングという言い方がされるようになっているわけである。八時三十分に集まるのは、それまではNHKの連続ドラマがあり、みなそれを見てからモーニングにやってくるからである。話題は、喫茶店でのモーニングと同様のものであるが、下関の場合、ポッタリチャンサといって、韓国釜山と下関との間の担ぎ屋（行商）を行なっている女性が多く、この人々が、韓国で仕入れて来た話（どこそこの占い師はよく当たるとか、釜山に在日朝鮮半島系住民との再婚を望んでいる女性がいるとかいった内容）を語ることが多いのが特徴である。

九時三十分から十時ころになると解散で、このあとは、ある人はパチンコ屋へ、ある人は病院へ、とそれぞれ自分の行くべきところへ出かけてゆく。

以上は、日本列島内の事例であったが、モーニングに相当する習慣は、日本国外、たとえばアジア各地などにも存在する。日本の事例を相対化する意味も含めて、以下、若干紹介してみよう。

事例14　香港

香港の人々は、一般的に朝食を外食することが多いといわれている。実際、香港の街を歩いてみると、早朝、六時ころから屋台や食堂が開いており、客がおかゆを食べたり、飲茶（茶を飲みつつ、二、三点の点心〈軽いおかず〉を食べること。中国広東地方の食習慣とされる）をとっている姿を目にすることができる。香港生まれ香港育ちの筆者の知人は、「香港では家で朝食をとる人はほとんどいない。夫婦共働きが多い香港では、妻が朝食をつくる時間がないため、皆、家や職場の近くの食堂や屋台で朝食をとる。一人で行く人もいれば、家族や同僚と食べる人もいる。出勤途中のような忙しい人は、大急ぎで食べてすぐに席を立つが、時間にゆとりのある人はそこでおしゃべりに興じることも多い」と述べ

ている。

香港の飲茶について取り上げた永倉百合子は、本来、飲茶は早朝の習慣であり、それが「どんどん延長され、今では飲茶タイムは昼下がりまで及んでいる」「毎日朝から賑わう飲茶だが、日曜祭日の朝はとりわけ活気に満ちた光景を見ることができる。休みの朝だからまだ混んでいないだろう、と思って行ってみると、すでに大半のテーブルは先着の人達に占有されている。大きなテーブルにおばあさん一人がポツンと座っていたとしても、それは一家のための場所取りなのだ。早起きの老人が一足先にきて、まもなくやって来る子供や孫のために席を確保しているのだ。ここは空いているなどと思ってそのテーブルに近づこうものなら、私達は「ここは、もういるよ」ときっぱり告げられるに違いない。人気のある酒楼だと休みの日の朝の席取りはかなり大変だ。」「酒楼の入り口にはたいてい新聞や雑誌を売る露店がある。そこで買って来た、多量の広告面をもつぶ厚い新聞をパラパラめくる人がいる。食べる前にもう一度店のそなえつけのポットのお湯で小皿や碗を洗っている人もいる。そしてまわりをせわしく動きまわるワゴンから自分の好きな物を選び、それを食べつつ、話したいことを話し、片づけるべき用事を片づけ、満腹になったらこのにぎやかな場所を後にする」といった記述を行なっている〔永倉 二〇〇二、四八―四九〕。

朝食としての飲茶の外食は、香港に限らず、広東地方の一般的な習慣のようである。賈蕙萱氏によれば、「広東の人は、朝は家でごはんを食べないで、『吃早茶（チーツァオチャー）』といって、朝食は外で」〔賈／石毛 二〇〇〇、二〇六〕とる。また、朝食を外食する習慣は、広東以外の中国各地にも存在するようで、各地からの詳細な事例収集は今後の課題とせざるをえないが、たとえば、湖北省の武漢市では、朝食を家で食べる人はほとんどおらず、皆、近所の食堂でとる。家族一緒の場合もあれば、出勤の時間にあわせて、夫と妻が別々の時間に食堂に行き、子は学校の時間にあわせて、夫か妻のどちらかに連れられて食堂に行くといったケースもある。外食するのは、夫婦共働きがふつうのため、夫婦ともに家で朝食を準備する時間がないからである。自炊をするのは、外食のお金を用意できない貧しい老人くらいであるという（武漢大学の王宣琦教授の教示による）。

事例15　ベトナム

ベトナムでは多くの人が朝食を外でとっている。筆者は、ホーチミン市とハノイ市の市街地を歩いたことがあるが、そのときも、早朝五時ころから、路上の屋台、露店でフォー（米でできたうどん）を朝食としてとる大勢の人々を実見している。現地の人々に尋ねてみると、「自宅で調理して朝食をとるのは、奥さんが外で働かなくてよかったり、メイドさんをやとっている政府の高官の家や富裕層だけで、庶民は皆、家の外で食べている」という説明を聞くことができた。

社会心理学者で、ハノイに滞在し当地の路地の生活世界を調査した伊藤哲司もベトナムの外食式朝食に注目しており、次のように記している。

朝食を家で作る習慣のあまりないハノイの人々は、路地に面した店で、フォー（ベトナムうどん）やソイ（蒸した餅米）などを食べることが多い。人気のあるフォー屋では、席がすっかり埋まっていて、回転も速い。プラスチック製の小さなテーブルに小さな椅子。路地に面した店先で、おばさんが忙しくフォー・ガー（鶏肉入りうどん）やフォー・ボー（牛肉入りうどん）を作り、おじさんや娘さんたちが、忙しくそれを各々のテーブルに運んだりしている。ハノイの学校は二部制が基本で、朝の部は午前七時から始まるから、早くから学生たちや子どもたちの姿も見かける（中略）。身なりの整った大人の姿も多い。食べ終わると急いで日本製のバイクにまたがり、職場に向かう人もいる。〔伊藤 二〇〇一、八〕

また、商社マンとして現地に滞在していた人物によるエッセーでも、

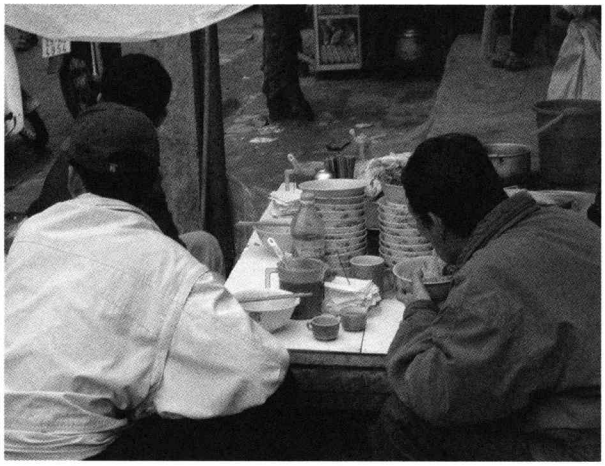

写真8　ベトナムの屋台朝食風景（ハノイ）

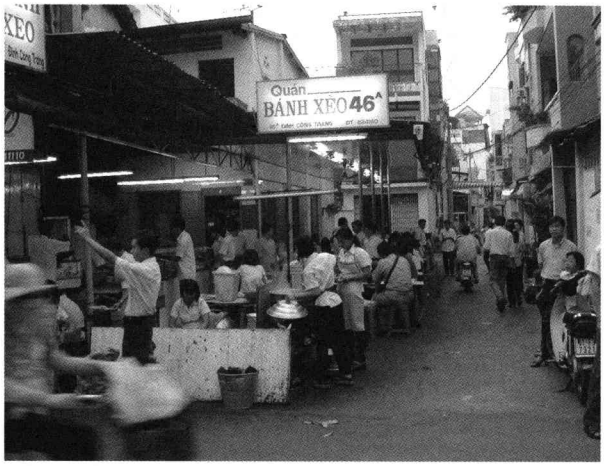

写真9　ベトナムの屋台風景（ホーチミン）

朝、ベトナム人のほとんどの家では料理はしない。朝食は外食。ハノイのフォーガー（鳥肉入り米うどん）から始まって、雑炊、ご飯、饅頭、その他。家の中で料理するのは夕食だけだ。

「毎朝、家族で朝食を外で食べるとなると、家計は大変だな」と、ベトナム人の友人に尋ねると、

「朝食の費用は結構かかりますよ。前はすごく安かったんですが、最近は朝食といっても馬鹿にできない金額です。家で作る方が安いに決まっていますがね、家ではちょっと……」

彼も奥さんの労働を増やすことが難しいと言っているのだろう。朝食は外で食べることになっている。家の中で調理をすると、調理用の練炭に火を点けることになって、家の中が暑くなる（中略）。

五時半に朝食を食べる人がたくさんいるということは、四時半ころから無数の朝食屋さんが活動を開始する。ありとあらゆる路上商店が、五時には移動を開始する。〔樋口　一九九九、一二三〕

というレポートがなされている。

事例16　プノンペン

ベトナムの隣国カンボジアの都市にも、朝食を外食する習慣がある。以下は、石毛直道とケネス・ラドルによるレポートである。

他の東南アジアの都市民とおなじように、もともとプノンペン市民は、忙しい朝は外食ですますことがおおかった。出勤前に近くの店に立寄り、肉や魚入りの粥か、コメでつくったウドンを一杯すりこむのが、勤め人の朝食であった。インフレとはいえ、露店でのこのような民衆の食事は、手のとどかない金額ではないようだし、ガスや電気の供給がままならないのでは家庭で朝食の準備をするのもたいへんだし、ということで、早朝から露店の食べもの屋はにぎわっている。〔石毛／ラドル　一九九二、二〇〕

事例17　バンコク

タイのバンコクでは、朝食に限らず、すべての食事を外食ですます人々が少なくないという。中には台所を持たない家もあるという。以下、森枝卓士によるレポートを引用してみよう。

屋台や食べ物屋で食べてすますか、あるいはお惣菜もご飯も買ってきて、そのビニール袋に入っているものを、お皿に盛って準備はおしまい、というわけなのである。さらにショックだったのが、それが独身の一人暮しに限らないということだった。台所もある家に住み、家庭を持っている人々でも普段は料理しないというのも珍しくないという。嘘みたいな話だけれども、土地のとある料理の先生に、家庭料理を教わったら、教える時にはやるけれども、家ではあんまり……、買ってくることが多くて、というのだ。最初は呆れたが、事情を知るにつれ、ある程度、納得がいくようになった。まず、外食にしても、屋台などだったら、家庭で作るのと同じくらいの予算ですんでしまう。貧富の差がまだまだ激しいから、人件費は安く、まとめて材料も仕入れているので、普通に市場やスーパーで買ってきて作ることを考えると、馬鹿らしいくらいなのである。よっぽどの人数の家庭でもない限り、買ってきた方が安いといっても、決してオーバーではないのだ。また、日本とは比較にならないほど女性の社会進出が盛んで、若いうちだけでなく、共稼ぎは珍しくない。いきおい、外食ですませるか、お惣菜を買ってきてすませるという構図になるのである。〔森枝　一九九七、一〇二―一〇三〕

事例18　シンガポール

かつて世界有数のスラムが展開したとされるシンガポールは、一九六〇年代、とりわけ一九六五年のシンガポール共和国建国以降の近代化政策により、現在、シンガポールの全人口の八五パーセント以上がHDB(Housing and Development Board. 住宅開発局）フラットとよばれる団地に居住している。各団地の一階には、雑貨店や食堂をはじめ、さまざまな店が並んでいるが、その中の一つで、どの団地にも必ずといってよいほど存在するのが、コーヒーショップ（華語では咖啡店）である。ここでいうコーヒーショップとは、シンガポールの銀座といわれるオーチャードロードなどにあるようなハイカラなものではなく、セルフサービスで、コーヒー、パン、フライドライス、やきそば、肉骨茶（バクテー）などを購入して席で食べる形式のものをさす。こうした大衆的なコーヒーショップは、かつては「古いショップ・ハウスの街の角に」あり、現在は、団地一階にある「二面開け放しの店で冷房などあろうはずもなく、すすけた天井から同じくらいすすけた扇風機がぶらさがっているのが関の山」〔田中　一九八四、一三二―一三三〕といった体の店のことである。

プラスチック製のテーブルと椅子は、風通しの悪い店内にはほとんど置かれず、店の前の歩道上に置かれている。歩道上の席は風が吹くと涼しく快適である。座席は、歩道上のほうから埋まってゆく。コーヒーショップの経営者は、現在は多様化しているが、一〇年ほど前までは、海南島や福州出身者が多かった〔山下　一九八七、五五〕。

団地の人々は、階下のコーヒーショップか、あるいは勤務先近くのコーヒーショップで朝食をとるのがふつうとされている。いずれも毎日行きつけの店である。子ども達には、母親がマーケットで買ってきておいたパンなどを家で食べさせ、大人はコーヒーショップへというパターンが多い。コーヒーショップへは、夫婦、家族、職場の同僚、その他の友人などと行く。一人で来ている人もいるが、多くは連れがいる。一人の場合は、コーヒー片手に新聞を読む人が多いが、連れがある場合は、さまざまなおしゃべりが交わされている。

そこでの話の内容は、他愛ないものだそうだが、人の噂、競馬などの

写真10　シンガポールのコーヒーショップにおける朝食風景

写真11　シンガポールのコーヒーショップにおける朝食風景

写真12　シンガポールのHDBフラット　1階部分にコーヒーショップがある。

ギャンブルの話、ダブロイド版新聞のネタになりそうな話、ちょっとした政治的な小話もなされるという。国家による国民管理が厳しいシンガポールでは、国民が表立った政府批判をすることは皆無とされているが、コーヒーショップでは諷刺的な政治批判の語りもなされているという（他に、政治批判の語りとしては、タクシーの車内で運転手が客に語るものが知られているという）。この場合、「コーヒーショップには客にまじって政府のスパイがいる」というフォークロアも存在するが、これは実際にいるというよりは、人々による政治批判に関する自己規制の心理のあらわれではないかという意見（シンガポール国立大学の林明珠教授による）もある。

朝食を外ですませる理由を筆者が現地の人々に尋ねてみたところ、多くの人は、「これが習慣だから」「朝は忙しくて家でつくれない」「外で食べたほうが安くつく」といった回答であった。朝食に限らず、シンガポールでは外食がさかんであり、このことについては、シンガポールは中国沿岸部からの「出稼ぎの労働者が集まった場所なので、かつては女性の人口がすくなく、いきおい外食が発達した都市となった。その歴史が現在の食習慣にもうけつがれているのであろう」［石毛／ラドル　一九九二、七九―八〇］、「移民たちのなかに、少ない元手で独立して商売をやりたいと思う者が、次々と屋台を出すようになった」［前川　一九八八、四〇］から、といった解釈が提出されている。

❸若干の検討

これまでの記述をふまえつつ、さらにデータの追加も行ないながら、以下、モーニングをめぐって検討を進めてゆく。

(1) なぜモーニングが行なわれるのか

筆者は、日本において行なわれているモーニングを調査する際には、モーニングを行なっている人々に、なぜ自宅で朝食をとらずに、喫茶店でとるのか、という問いかけを必ず行なってきた。そこで得られた回答は、「習慣だから」というのが最も多かったが、それ以外にも理由を述べているものがある。それらは、多岐にわたり、また複合的である場合も多いが、あえてその内容を整理してみると、

①労力の軽減
②単身者のため
③コミュニケーションの場として必要

の三点に分けることができる。

たとえば、①に含まれる回答としては、

「夫婦共働きで朝は忙しく、家で朝食をつくる時間がない」「家内工場の仕事が忙しく、朝食をつくる暇があったら一つでも多く製品を仕上げたい」「たまの日曜日くらい母親に楽をしてもらいたい」「女は一日中、誰かに何かをしてあげている。モーニングは、してあげるのではなく、店の人にしてもらうもの。ささやかな贅沢」「毎朝、朝食をつくるのが面倒。楽をしたいから」といったものがある。

労働に追われる都市の労働者にとって、朝食を外食ですませることは、時間と体力の消耗を軽減する手段の一つであった。たとえば、大阪市生野区や神戸市長田区におけるヘップサンダル、かばん縫製などの家内コーバ（工場）で働いている人の場合、近年はそれほどでもないが、最盛期には朝七時から夜中の一時、二時まで仕事にかかりきりになっても仕事がはけないこともあった。そのため、家で朝食を準備する時間も惜しんで働いたのであり、朝食は喫茶店モーニングとなった。また、この場合、昼・夕食も外食であることも珍しくなく、あらかじめ行きつけの店に電話をして料理をつくっておいてもらい、店に入るとすぐに食べられるようにすることもあったという。

なお、都市労働者と外食の関係については、神戸市長田区で育った森栗茂一が自身の幼少期の食生活について記した次の記述が参考になる。

「農村の出身である母は日常において外食をすることは全くなく、そういった外食を『テンヤモノ』といって軽蔑していたが、労働者としての疲労のため、遠足・運動会という非日常のときにはこれらの利用を自らと子供に許して、いくばくかの金銭とひきかえに、たまさかの休息を得たのであろう。毎日の朝食は御飯と汁物であったが日曜だけはパンであった。これも、せめて日曜ぐらいは御飯を炊かなくてすまそうという母の知恵であろう。このパンは自宅の南一〇〇mの所のパン屋に子供が毎日曜日の朝買いに行っていた。第二世代の母の心は田舎風なのに、徐々に都会の利便性を利用していきつつあったし、そうでなければ都市では、女一人が子供をかかえて生きていけなかった」〔森栗 一九九〇、六五〕。

このケースは、喫茶店モーニングの利用には至っていないが、おそらく、この生活の延長線上で、喫茶店モーニングの利用が開始されることになるのであろう。

②は、単身者が、朝食を自炊するのが面倒、あるいは一人での食事が寂しいということでモーニングに出かけるケースである。単身赴任のサラリーマンや、韓国・済州島などから大阪・生野区の町工場などに出稼ぎに来ている男女、また独居老人などの場合が該当する。なお、単身者が多いと屋台外食がさかんになることは、江戸においても該当する〔大久保 一九九八〕。また、赤松啓介の次の記述にあるように、第二次大戦前の大阪のスラム街にあった長屋などでも単身者の外食が多かった。

（五十軒長屋、百軒長屋と呼ばれた長屋で）「生活してみてわかるのは便所と炊事で、これには泣かされる。便所も炊事場も二〇戸で共用だから、朝は満員騒ぎでどうしようもない。独身者は排便も外でするし、外食す

るのが多くなり、かなり負担が重くなる。ドヤ暮らしや百軒長屋住いは安くつくだろうと錯覚するらしいが、かえって高くつく」〔赤松　一九九一、四〇六〕。

③は、「モーニングに来ないと情報が入らない」「早起きの老人にとっては、モーニングでの世間話が何よりの楽しみ」「モーニングに顔を出せへんと、『都会』の情報からおくれてしまう」といった言説に明確にあらわれている。なお、この場合、最後の言説にある「都会」については、この言説の話者は、都市部の、しかも喫茶店から数軒先に居住しており、決して「田舎」に暮らしているわけではないのであって、ここでいう「都会」とは、人々が集まり、情報が行き交う場所、すなわち喫茶店という意味である。これらの表現からもわかるように、モーニングは、単なる飲食の場ではなく、コミュニケーションの場となっているのである。「朝食だけなら、コンビニ弁当ですませたってかまわない。しかし、コンビニ弁当には会話はついてこない。モーニングには、会話とふれあいがある。家で朝食を食べたあとに、コーヒーだけ飲みに来る人もいるが、そういう人は、常連客やマスターとの井戸端会議が目的だ」とは、大阪市内のモーニング常連客の声だが、これなどもコミュニケーションの場としてのモーニングのあり方を如実に表現した言説といえるだろう。

以上、モーニングが行なわれる理由として考えられるものを三点に分けて指摘したが、実際にはこうした理由が複合することによってモーニングが行なわれているといえよう。

(2) 日本における分布

喫茶店のメニューとしてのモーニングサービス、モーニングセットは、日本全国いずれの都市においても存在するものと予測される。そして、それを利用する多忙なサラリーマンやOLも、おそらくは広く存在するものと予想されよう。しかし、単なるメニューとしてのモーニングサービス、モーニングセットではなく、また、サラリーマン・OLの利用が中心といったものでもなく、家庭の主婦、子供、老人、家内工場の人々といった、より広範な人々がその居住地域における日常生活の一部として喫茶店で朝食をとる現象（すなわち「地域の習慣としてのモーニング」）となると、その分布は全国に普遍的とはいいがたい。

筆者が現在までに確認しえたデータでは、この習慣としてのモーニングは、前章での提示のとおり、豊橋市以西、中京圏、阪神圏、中四国に事例を見出すことができ、それも都市部の、おそらくは下町的な地域でさかんに行なわれているものと見ることができる。ただし、分布の問題は、精密な悉皆調査を行なわなければ結論を出すことができない。現時点では、筆者のもとにそうした精密な調査にもとづいたデータが存在するわけではないので、断定はもちろん避けなければならないが、現時点での限られた情報からの予測としては、叙上のような分布傾向を見とおしとして指摘しておきたい。

この場合、たとえば、東京やその近郊などでは「地域の習慣としてのモーニング」は一般的ではないといえるのではないだろうか。たとえば、中京圏にしろ、阪神圏にしろ、中四国にしろ、「モーニング」ということばが、喫茶店での朝食習慣をさすことは、現地の多くの人が知っており、大阪には、中学校の英語の試験で、morning を「朝食」と訳す生徒がいる、という笑い話も伝わっているほどである。これに対して、東京では、大田区や荒川区の、下町的な雰囲気をもったところでも、「モーニング……何それ？」という反応が返ってくるのであり、これが喫茶店での朝食習慣をさすものであることは知られていないのである。

あるいは、東京やその近郊で育ち、現在もそこで暮らす大学生などは、筆者が民俗学の講義で阪神圏のモーニングについて話題にしたのを受け、次のような興味深いコメントをしている。

「前にテレビである芸能人が、『わたしの実家のほう（関西）は、みん

な朝ご飯を喫茶店に食べに行きます』というのを見て、面白いところもあるんだなあと思っていたのですが、これのことだったんですね」（武蔵大学学生、東京都出身）。

「わたしの祖母は尼崎に在住していますが、わたしが幼いころから、遊びに行くと、毎朝なぜか、『アメリカン』という喫茶店に連れて行かれました。わたしは、祖母がただ単に朝食を作るのをめんどうくさがっているのだと思っていたけれど、先生がいうようにもっと深い意味があるのかもしれない。埼玉には「モーニング」はありません」（武蔵大学学生、埼玉県出身）。

こうしたコメントからも、東京とその近郊の人々にとって、モーニングは縁遠いものであることがうかがえるだろう。また、この他、たとえば、筆者の生活する東北地方の一都市である秋田市においては、秋田駅近くの商業地域の喫茶店にモーニングセットのメニューは存在するものの、これを利用している人はきわめて少数のサラリーマンに限られており、「地域の習慣としてのモーニング」などは全く存在していない。

それでは、そもそもなぜモーニングは豊橋以西において盛んなのだろうか。この問いに対する明確な答えを筆者は用意できていない。ただし、筆者はいまのところ、次のような仮説を立てている。すなわち、モーニングが盛んな阪神圏のうち、少なくとも大阪には、米飯を昼に炊き、朝は前の晩に炊いた飯をお茶漬けにして食べるという習慣があった。時間を節約する商家の生活に由来するものだという説〔前垣 二〇〇〇、一五五〕もある。そしてまた、阪神地域はパン食の盛んな地域でもあった。総務庁「全国消費実態調査」によれば、一ヶ月のパン需要は、兵庫県が全国一位（三〇〇一円）で、大阪は二位（二八六六円）、次いで、和歌山県、奈良県、京都府の順となり、東京都は八位である〔前垣 二〇〇〇、一〇二〕。これは、「合理的」な〈大阪人〉における時間のやりくり上手の反映であり、お茶漬けの伝統がトーストにスイッチしたものだとの説もある〔前垣 二〇〇〇、一五七〕。こうした歴史的蓄積に、工業地域における家内工業に従事する人々の時間節約や、下町的な情報交換の場としての機能が求められたことなどの理由が複合して、モーニングという習慣が成立しているのではないだろうか。もっとも、この仮説からすれば、中京圏をはじめとする、大阪以外のモーニング盛行地も、大阪同様の食生活の伝統を持っているということになるのであろうが、このことを論じるための正確なデータを現在の筆者はもちあわせていない。今後の調査を待ちたい。

なお、モーニングの分布が濃厚な地方でも、地域や階層によっては、モーニングが行なわれていない場合があることもここで確認しておきたい。たとえば、阪神圏においても、「小学校から高校までは阪急雲雀丘花屋敷駅、大学は阪急門戸厄神駅、大学院は阪急六甲駅、買い物は阪急梅田駅の阪急百貨店というように、阪急沿線の中で育ち、梅田より南には行ったことがない」（これらの場所は、いずれも下町的な生活様式とは異なる暮らし方が展開されている生活圏である）というある三十代の女性は、「家族にモーニングに出かける人は皆無であったし、モーニングというものがどのような雰囲気のものかわからない」と語っている。前章での記述内容や、この女性の発言内容などからも推測されるように、モーニングは、都市部のうちの工業地帯、とりわけ家内工場などが密集している地域においてとくに盛んな習慣であるということができるだろう。

（3）モーニングの歴史

喫茶店のメニューとしてのモーニングサービス、モーニングセットは、一九六〇年代後半から存在している。その発祥の地としては、前章で紹介しているように、豊橋説と松山説とがある。しかし、発祥の地とされる場所においても、発祥の店については異見を述べる人もおり、また、

こうしたメニューは、同時期に複数の地で発生する可能性も十分あり、起源を特定しようとすることにはあまり意味がないといえよう。

ただ、注目しておきたいのは、豊橋にしろ松山にしろ、モーニングサービスの開始が、どちらも一九六〇年代中ごろであること（豊橋の「仔馬」は一九六四年か一九六五年に、松山の「モミの木」は一九六六年ころにそれぞれモーニングを開始したとされる）、「サラリーマン」「出勤前のお客」へのサービスとして開始されたものであること、の二点である。

発祥の地や店についてはともかく、モーニングが生活の中に入りこんできたころの事情については、次のような語りが存在する。

「（話者の住む東大阪市衣摺周辺で）モーニングが流行りはじめたのは昭和三十九年（一九六四）生まれの娘が生まれたころから。街（大阪市内をさす）ではもっと早くからやっていたかもしれない。各家に水道が引かれたのもこのころ。以前は、洗濯や炊事は共同水道で行なっていたが、共同水道の前では、近所の奥さんたちがいつも井戸端会議を行なっていた。それが、各戸給水になってからは、モーニングが共同水道の井戸端会議にとってかわった」。事例4の話者の語りである。共同井戸や共同水道が使用されなくなった時期とモーニングが盛んになりはじめた時期とがほぼ重なっているという記憶は、各地でしばしば耳にするところである。各戸給水の実現によって共同井戸・共同水道における文字通りの井戸端会議が消滅しつつあった状況下に、モーニングが登場し、これが井戸端会議の機能を肩代わりしたということになる。

モーニングは、当初、喫茶店経営者側にとっては、「サラリーマン」「出勤前のお客」へのサービスを意図したものであったが、これが地域の生活者、とりわけ女性たちには、井戸端会議の場として受容されたのである。供給側の意図とは異なる受容の実態があり、興味深い。

なお、メニューとしてのモーニング、およびモーニングという朝食外食の習慣自体は、おそらく一九六〇年代からはじまったのであろうが、都市住民と喫茶店との日常的な関わりの歴史は、モーニング以前からあった。それは、たとえば、ミルクホールのようなもので、これは、「今の高齢者が若い頃に、（神戸）長田にようあった喫茶店」で、「入り口に白い暖簾、ガラスケースの中に羊羹を挟んだロールケーキと醤油せんべい。壁には蜜豆・ぜんざい・ミルクコーヒーと品書きがあ」った。このミルクホールが「長屋住民の応接間であった」という（森栗　一九九九a）。ミルクホールでの喫茶は、朝食としてなされていたわけではないようだが、神戸（長田）などでのモーニング盛行の背景には、このミルクホールにおける住民と喫茶店との関わりの歴史が存在していたということはできよう。

（4）アジアの中のモーニング

日本社会におけるモーニングの分布は、（2）で検討したとおりだが、視野を広げて、朝食を外食する習慣をアジアに求めると、その事例が広く存在していることが確認できる。現段階では、香港、中国、ベトナム、カンボジア、タイ、シンガポールの事例を知ることができ、それらはいずれも都市部の暮らしに根付いた習慣となっていた。それらの事例からは、朝食の外食が行なわれる理由として、①女性の社会進出＝男女共働きにともなう家事の省力化、②電気・ガスなど近代的インフラの未整備がもたらす朝食準備の負担を軽減させるため、③安い人件費などを背景に、外食のほうが安くつくという実態があるから、④単身出稼ぎ者が面倒な自炊を避けた伝統、⑤熱帯気候下において屋内で調理をすると室内温度が高くなるのでこれを避けるため、⑥なじみの仲間との談話が可能、といった理由をうかがうことができる。

これらのうち、①、④、⑥などは、日本のモーニングにも通じるものといえる。アジア的視野の中で眺めた場合、むしろ都市社会においては、

朝食を外食することのほうが一般的だといってよいくらいであり、日本のモーニングには、アジア都市社会に共通する生活文化としての性格が存在するといっても過言ではないであろう。[5]

アジアの外食朝食の分布は、本稿で扱った地域以外にもより広く存在する可能性があり、今後さらに事例の収集と検討を進めたい。ただ、注意しておきたいのは、アジアの都市社会においても外食朝食の行なわれない地域が存在するという点である。たとえば、ラオスのヴィエンチャンの街には屋台が少なく、隣接するタイの状況とは対照的である。この差異について、森枝卓士は、「都市とその周辺の流通、交通網がネットワーク化されているタイの場合と、それが遅れたラオスの差」〔森枝 一九九七、一〇三〕などがその原因かと推測している。

また、韓国社会では、朝食を外食する習慣は、タクシーの運転手などが技師食堂などと呼ばれる食堂を利用したり、二日酔いによく効くとされるヘジャングク(牛の血を固めたものなどを入れたスープ)屋が早朝から営業したりしているのを除けば、基本的に存在しないといってよい。このことが何を意味するかについては、今のところ今後の課題とせざるをえないが、おそらくは「儒教」「農本主義」、商業観、女性の社会的位置などとの関わりに着目した考察が求められることになるだろう。日本のモーニングも含めたアジアの外食朝食の分布と意味については、その背景との関わりの中で木目細かく検討していかなければならない。

(5)「もう一つの公共圏」としてのモーニング

モーニングの場は、一つの公共圏として把握することも可能である。公共圏とは、最大公約数的な説明として、「他者と共有する(あるいは共有できる)事柄に関する発話空間」〔大貫 二〇〇一、八二〕と規定されるもののことである。公共圏については、ユリゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換―市民社会の一カテゴリーについての研究―』をはじめ、多くの議論がなされてきているが、それが指し示すものの内実は本来一元的なものではありえない。

しかし、従来、公共圏というと、ハーバーマスにおける初期の議論がそうであったように、市民層(ブルジョアジー)の公共圏に限定して理解される傾向が強かった。市民層の公共圏とは、「パンフレットや新聞による文芸共同体やカフェなどにおける対等な市民の対話を成立させる場や空間」〔上野 二〇〇二、二一一〕、「言語によって相互理解する市民たちの共同性」に支えられた空間〔上野/毛利 二〇〇〇、一九六〕、「論争・論証型のディスクール」〔大貫 二〇〇一、一〇〇〕によって成立する空間のことである。

この市民層の公共圏については、「絶対主義の公権力と宮廷・教会等の文化的権威に対抗する一方で、より劣位の公共圏―地方や都市下層の『人民的公共圏』など―を抑圧する関係にはじめからあった」点や、「近代家父長制のイデオロギーが深く刻印されており、女性の排除(女性の『主婦化』)はこの公共圏の存立にとって本質的な意味をもっていた」点、そうした「『公共性の他者』を排除する市民的公共性は、対内的には等質の一元的な空間であった」点、などについて批判がなされている〔斎藤 二〇〇〇、三〇〕。

そして、市民的公共圏に対するオルタナティブとして、「対抗的な公共圏」(counter publics)、「オルタナティブ公共圏」(alternative publics)といった用語で把握される公共圏の存在がクローズアップされるに至っている[6]〔斎藤 二〇〇〇、一四〕。ここでは、上野俊哉や毛利嘉孝らにならって、こうした公共圏のことを「もう一つの公共圏」と呼ぶことにする。

この「もう一つの公共圏」とは、市民的公共圏から排除された人々が成立させてきた公共圏のことであり、その特色は、「優勢な公共圏とは異なった言説のモード―たとえば一人称の物語り―や多彩なレトリックが重んじられるかもしれず、逆に、経験の形跡に裏打ちされない言葉や

あまりにも理路整然とした物言いは信頼をかちえないかもしれない」といった特性や、「自分が語る意見に耳が傾けられるという経験、少なくとも自分の存在が無視されないという経験が可能となる」という特性、この公共圏を「形成する人々の具体的な生／生命に配慮するという『親密圏』としての側面もそなえている」といった特性が見出されるところにある〔斎藤 二〇〇〇、一五〕。

これまでの研究で具体例としてあげられているのは、奴隷として故地を離れた地に生活させられてきた黒人たちによる非合法の自由ラジオ、ダンス音楽や口承の物語、ラップやトースティングなどの語り、レコードショップ、ダンスホール、カーニバル〔上野 二〇〇二、二一二―二一三、毛利 二〇〇二、一九九〕、あるいは、黒人に限定されないところで労働組合〔アーノウィッツ 二〇〇二〕、自家用車の中、日本の公衆浴場〔毛利 二〇〇二、二〇九―二一七〕などがある。

この場合、モーニングの場は、あきらかに、この「もう一つの公共圏」として理解することが可能である。モーニングの時間と空間は、他者と他者とが場を共有しながら、そこでさまざまな言葉を交わす公共圏である。ただし、そこで、語られるのは、決して論理的に整理された明晰な言葉ではない。むしろ、そうした論理的な言葉で形成される市民的公共圏からは排除される言説あるいは人々が交流する場としてこの場はある。そこでは、経験の形跡に裏付けられた言葉や物語が歓迎され、また、他者との交流と同時に、地縁を中心とした「親密圏」としての側面も見出される。これは、叙上の「もう一つの公共圏」がもっている特性そのものである。

なお、同じコーヒーと語りの世界でも、よくいわれるようにヨーロッパのカフェが近代市民社会成立の基盤としての意味をもっていたこと〔小林 一九八四、臼井 一九九二〕と、日本のモーニングの特性とは、異なるものであることは明らかだろう。前者は、市民的公共圏そのものであり、後者は、「もう一つの公共圏」に相当するものであるからだ。

市民的公共圏の限界が広く認識されるようになっている今日、公共性のあり方を再考しようとする際に、この「もう一つの公共圏」のあり方を凝視する必要があるといえようが〔斎藤 二〇〇〇、九五―九七〕、この種の議論は、抽象的な言葉の空中戦に留まるきらいがある。「もう一つの公共圏」の可能性と限界については、フィールドワークの実践の中で吟味する必要があり、モーニングの現場を見つめることは、こうした議論を生産的に展開する上で資するところ大といえよう。

以上、モーニングをめぐって記述と問題点の整理を行なってきた。今後は、分布についてのより広範な調査、「もう一つの公共圏」としてのモーニングにおける語りのあり方についての分析などを進めてゆきたい。

註

(1) 団地アパートに関する都市民俗学的研究としては、倉石〔一九九〇〕がある。

(2) モーニングサービスとモーニングセットは、区別される場合もある。モーニングサービスは、通常のコーヒー一杯の値段でパンその他の料理を無料でつけるものであるのに対し、モーニングセットは、コーヒー一杯の値段にパンその他の料理の値段を加えてセット料金をとるもの、という区別をする店がある。もっとも、この場合のモーニングセットも、料理の代金を安く設定して結果的に安い料金でモーニングセットを提供しているという意味で、モーニングサービスの語を用いている店もある。これらの用語法は、店によって異なる。

(3) 本事例の調査にあたっては、事例中の女性の孫にあたる武蔵大学人文学部学生の中西美津奈さんの協力を得た。明記して謝意を表する。

(4) 筆者は、二〇〇一年十一月三十日、森栗茂一氏のご案内で神戸市長田区のコレクティブ住宅を訪ねることができた。明記して森栗氏に感謝申し上げる。

(5) この点に関しては、たとえば森栗茂一が、モーニングがさかんな神戸市長田区の下町と「アジア」との共通性、長田における「内なるアジア」性を看破している。すなわち、長屋とインドネシアのロングハウス、長屋の一角の地蔵とタイの土地神の祠、喫茶店モーニングと中国・インドの屋台朝食を並べて示し、「高度経済成長までは、長田には『内なるアジア』があった」と述べている〔森栗 一九

九九b]。

(6) 「もう一つの公共圏」については、ポール・ギルロイのディアスポラ論を敷衍しながら問題を提起する上野／毛利〔二〇〇〇〕、上野〔二〇〇二〕、毛利〔二〇〇二〕などの論考や、ドイツにおける市民的公共圏を、そこから排除された女性、ユダヤ人の発話空間から検討した大貫〔二〇〇一〕などを参照。

参考文献

赤松啓介　一九九一　『非常民の性民俗』明石書店。

石毛直道／ケネス・ラドル　一九九二　『アジアの市場―歴史と文化と食の旅―』くもん出版。

伊藤哲司　二〇〇一　『ハノイの路地のエスノグラフィー―関わりながら識る異文化の生活世界―』ナカニシヤ出版。

岩本通弥　一九八三　「風呂屋と床屋―失われたコミュニティ空間―」『歴史公論』7（都市の民俗）。

岩本通弥　一九八五　「他界としての風呂屋―江戸から東京への転換―」『歴史手帖』13―5（他界としての江戸・東京―東京論その1―）。

岩本通弥　一九八六　「サラリーマンの生活風景」『都市鼓動　まち』（日本人の原風景4）、宮田登他編、旺文社。

上野俊哉　二〇〇二　『ディアスポラ理論における歴史の文体―「もう一つの公共圏」から「様様なキャンプ」へ―』『歴史と空間』（歴史を問う3）、岩波書店。

上野俊哉／毛利嘉孝　二〇〇〇　『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房。

臼井隆一郎　一九九二　『コーヒーが廻り世界史が廻る―近代市民社会の黒い血液―』中央公論社。

大久保洋子　一九九八　『江戸のファーストフード―町人の食卓、将軍の食卓―』講談社。

大貫敦子　二〇〇一　「排除された〈私〉の言葉―ドイツ市民社会における公共圏形成の言語とジェンダー―」『思想』925。

賈　蕙萱／石毛直道　二〇〇〇　『食をもって天となす―現代中国の食―』平凡社。

神崎宣武　一九九九　「喫茶店」『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館。

倉石忠彦　一九九〇　『都市民俗論序説』雄山閣出版。

小林章夫　一九八四　『コーヒー・ハウス』駸々堂。

斎藤純一　二〇〇〇　『公共性』岩波書店。

高岡弘幸／村上和弘　一九九七　「コンビニの民俗」『祭りとイベント』（現代の世相5、小松和彦編）、小学館。

高桑守史　一九八九　「路地裏のユートピア―橋本五郎「地図にない街」にみる都市幻想―」『国立歴史民俗博物館研究報告』24。

田中恭子　一九八四　『シンガポールの奇跡』中公新書。

永倉百合子　二〇〇二　「飲茶点描」『アジア遊学』36、勉誠出版。

中澤天童　二〇〇〇　『摩訶不思議シティ名古屋の本』PHP研究所。

樋口健夫　一九九九　『ベトナムの微笑み―ハノイ暮らしはこんなに面白い―』平凡社新書。

前垣和義　二〇〇〇　『大阪くいだおれ学』葉文館出版。

前川健一　一九八八　『東南アジアの日常茶飯』弘文堂。

毛利嘉孝　二〇〇二　「ヴァーチャリティ―オルタナティブな公共圏をつくりだす―」『現代思想』30―6。

森枝卓士　一九九七　『図説東南アジアの食』河出書房新社。

森栗茂一　一九九〇　『河原町の民俗地理論』弘文堂。

森栗茂一　一九九四　「試みとしてのローソンの民俗誌」『京都民俗』12。

森栗茂一　一九九八　『しあわせの都市はありますか―震災神戸と都市民俗学―』鹿砦社。

森栗茂一　一九九九a　「随想　長屋の復興」『神戸新聞』一九九九年一月二十二日。

森栗茂一　一九九九b　「随想　アジアタウン」『神戸新聞』一九九九年三月九日。

山下清海　一九八七　『東南アジアのチャイナタウン』古今書院。

S・アーノウィッツ　二〇〇二　「対抗的公共圏としての労働組合」『現代思想』30―6。

ユリゲン・ハーバーマス　一九九四　『公共性の構造転換―市民社会の一カテゴリーについての研究―』（細谷貞雄・山田正行訳）、未来社。

（秋田大学教育文化学部、元国立歴史民俗博物館民俗研究部）

（二〇〇二年五月八日受理、二〇〇二年十月十一日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
vol.103 March 2003

The Urban Folklore of the "Morning Set"

SHIMAMURA Takanori

In the study of folklore, i.e., in the study of urban folklore, there is a growing accumulation of studies on various types of living space that exist in the city. However, there have not yet been any folklore studies made on the subject of the coffee house. The coffee house is, needless to say, a place to eat and drink, but from the point of view of folklore studies, it can be pointed out that there is more to the coffee house than its role in providing a place for eating and drinking.

This paper focuses on the coffee house, especially on the phenomenon of the "morning set" (the habit of eating the "morning set" at a coffee house instead of having breakfast at home), defining the phenomenon and arranging the issues. The comments made in the paper are as follows.

1) The reasons that people have a "morning set" are one or more of the following: a) to save effort, b) because it is convenient for single people, and c) for communication.

2) The "morning set" in Japan can be seen in urban areas west of Toyohashi, i.e., in cities in the Chukyo (Nagoya), Hanshin (Osaka and Kobe), or Chushikoku (Chugoku and Shikoku) regions, particularly in the old downtown areas of industrial zones.

3) The "morning set" is thought to have come into existence in the late 1960s. At that time, the coffee house owners had begun providing the "morning set" or "morning service" for salaried workers who stopped by on their way to work; however, as the idea was accepted into the community it began to serve as a meeting place for the people, especially women, of the community to get together and talk.

4) If we look at the whole of Asia, in urban society it is almost more widespread to take breakfast outside the home, and it can be said that the Japanese "morning set" contains an aspect of life and culture that is universal all across Asian urban communities.

5) The venue of the "morning set" is a communal space where strangers share the same space and exchange words with each other, but the words that are exchanged there are never theoretically sound, clearly defined logical arguments. Rather, in the case of the "morning", the coffee house exists as a place to meet people and exchange opinions that are excluded from the "citizens' communal space" which is made up of logical arguments. Therefore, one might regard the "morning set" venue as "another communal space" as compared to the "citizen's space".